
イギリスの国民と文学（続）

北 澤 義 弘

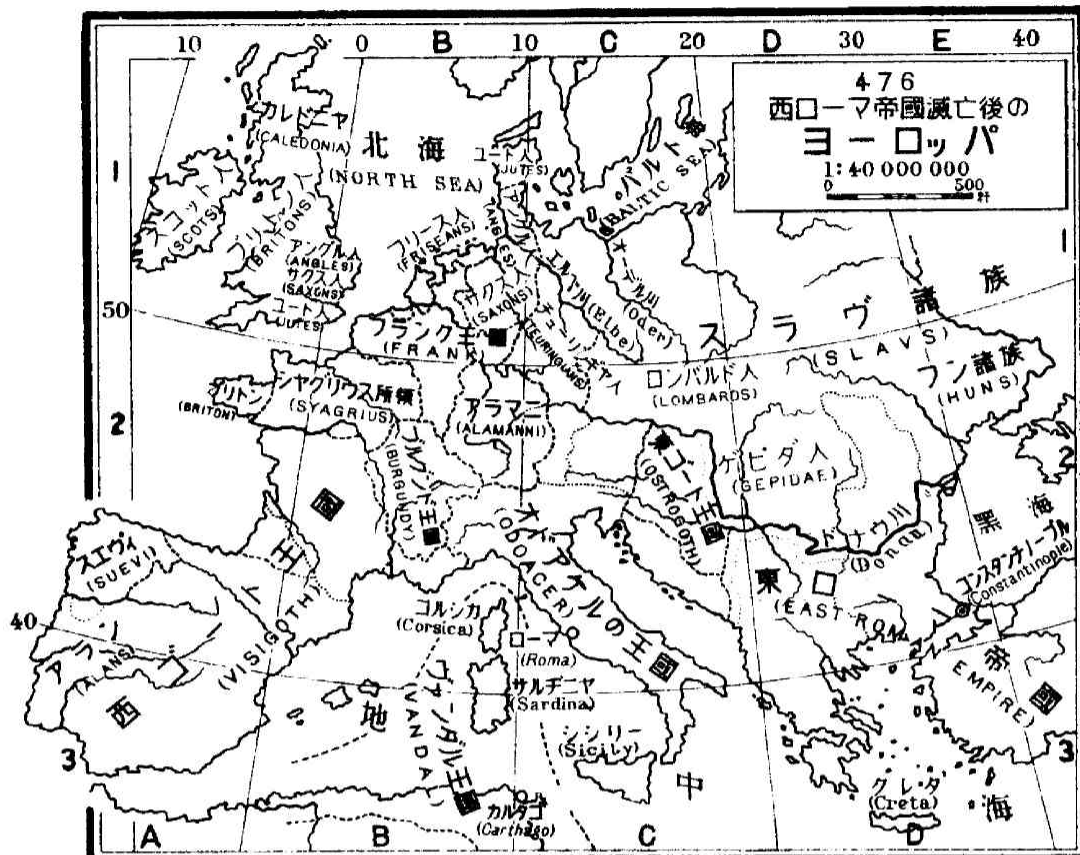
ブリテン Britain とイングランド England という二系列の名を未だに保有しているこのイギリス国民の文学の形成について、国際経営論集 No. 3 (1992.3 神奈川大学) の本題に続いて、この度はブリテンの側から光をあててみたい。

前篇で既に「ケルト民族」の由来に触れた。そこで述べたように、彼らは遠く紀元前2000年頃から青銅器とともに段階的にアイルランド、ブリテン諸島に到来している。未だ不明の点が多いものの現在までに推測されている所を年代、地域、種族に着目して要約し、やがて彼等の持っていた神話、説話、言い伝えなどについてイギリス文学に符合させてみる積りである。

ケルト諸部族の時代

歴史上明白なケルト人のブリテン諸島への移住は前7世紀には鉄器を伴い、ついで前5世紀、3世紀と行われている。勿論それよりはるか以前に彼等の先駆者達は到来し、ビーカー文化も既に存在していた。考古学上それがケルト人であると言う明確な結論にはまだ達していない。現在のアイルランドにあたる所にはスコット人（ゲール人）、ブリテン島にはブリトン人（キムリ人）、この島の北部のカレドニア Caledonia 地方にはピクト Pict 人が居を占めていた。更に前1世紀初期にはベルガエ Bergae 人が到来している。また

西ローマ帝国滅亡後のヨーロッパ



フランスのブルターニュ Bretagne 地方にもブリトン人が海を隔てて住んでいた。これらの種族は皆ケルト人に属している。しかしケルト人達はそれぞれ分散して暮らしており、国家的統合や中央集権体制を敷いて強力な国家的団結を図ることは不得手であった。

前55年、ローマ帝国のシーザーに征服され、ブリテン島は半分以上ローマ帝国の属領となった。そのため先住のケルト人は北方と西方に押しやられた。島の西部山地に籠ったブリトン系の人々はウェールズ Wales 語を話し、彼らの文化を保っていた。一方アイルランドはローマの直接の攻撃をまぬがれたので9世紀のヴァイキング侵略の頃までは比較的平穏に過し、ゲールック語 Gaelic 又はゴール語 Gaol とその文化を維持していた。大陸のケルト語は消滅してしまったので島のゲールック語だけが今ではケルト語の手掛りである。その文化は遠くハルシュタット以来受け継いで来た固有のもので造形

物や社会制度の中にうかがい知ることができる。そこに伝わる伝承文学は職業的語り部フィーリー *filich* や吟遊詩人バード *baird* の物語りにより、後のキリスト教のもたらした文字の渡来の時まで語り伝えられて来た。その社会はドルイド神官 *druidh* を精神上、社会生活上の指導者として形成したものである。そこには幾多の英雄譚もあることから推して、ゆるい共同体の部族又は地域の主領達が支配し、相互に争ったり、提携したりしたものと思われる。騎士達の武勇談は所属のバードによって物語詩 *epic* の形として歌われ、武勇が讃えられた。シーザーのガリア戦記 *Commentarii De Bello Gallico* は、ドルイド神官や僧侶は戦争への参加が免除されたと記している (*Gall. Vol. 14*)。従って彼等は多数の志願者のなかから選ばれ、7年から20年もの勉強と詩の暗記が課せられた。それ故仲間から絶対的尊敬を受け、一定の森の聖所で祭事を執り行ったのである。彼は口伝による神話をその骨子とした儀式を執行している。この習慣は他の方面、特にギリシャ、フランスやその他インド・ヨーロッパ語系の多くの民族にも見られると民俗学 *folklore* では説明している。何れもケルト族や他のインド・ヨーロッパ系民族に拘わりのある所だと言うことに注目したい。

アイルランドの神話はローマ侵入以前からのものがその厳格な口伝と保守的なゴール語のおかげで断片的とは言えよく伝承され (*the History of Ireland*, E. Hull, p. 17), 6世紀末から記録に残りはじめた。1000年以上もの間よく保存されてきた。フィーリーの語る神話群として代表的なものに「アルスターの勇士」 *the Champion of Ulster* がある。ローマ占領以前の英雄譚で、フィーリーの好む話題であった。コンホーバー・マック・ネッサ *Conchobhar Mac Nessa* 時代の六つの国々の騎士の武勇伝である。これと対照的な庶民の物語りはフィン *Finn (Fingal)* 神話群であり、遠い頃からの異教に深く根ざした話である。アルスターものと違い叙情があり神話、民俗学上の深い意味を含んでいる。文学の記録として大量に現れたのは12世紀になってからであり、マックファーソン *MacPherson* の *Ossian* で有名にな

った。それは野外の文学で、原始林の中をさまよう狩猟生活を描いた民族全体のサーガである所がアルスター神話と異っている。別に Ossianic Cycle とも呼ばれるものである。

更にアイルランドの最古の神々の話がダーナの種族神話群 *Tuatha De Danaan* で、それはダーナ女神の子孫の意を持っている。神話学上インド・ゲルマン系神話につながる要素がある。子孫の一人はルッド、またはヌッドと言う名を持ち、Caer Ludd は London の語源である。同市のルッドゲイトの丘はルッドの墓と言われている。また子孫の中で最も強力な神であるグィディオンはチュートン族の神ウォーデン（オーディン）に相当すると考えられている。かくてダーナの子孫は天空の神話の神々と係わりをもつものである。その一人にリーア Lir またはレーア Llyr という大洋を意味する神がある。彼について Geoffrey of Monmouth は King Leir と言っているがそれは Shakespeare の *King Lear* の原型である。

ウェールズの方は神話の保存がアイルランドほどよくないが、それでも12世紀には多くを書き残している。「キュルークとオルウェン」 *Culhwch and Olwen* や「四分枝」 *The Four Branches of the Mabinogi* は11世紀になって記述された。かなりよい文章で残されたブリテンの神々の物語りである。登場する神々はブリトンの古い時代のものでありその口碑は大変素朴な内容であったが、記述者達のブリタニヤ的ロマン主義のせいか名文に近い表現である。それ故かえって神話の伝承性の方が薄れた嫌いがある。むしろ中世に向けての文学上の素材として意味があろう。アイルランド、スコットランド系の神話よりむしろフランスに係わる地中海型、ギリシャ・ローマ型の匂いがする。

このウェールズ神話を記述した原本は現在オックスフォード大学に残っている14世紀に作られた写本「ハーゲストの赤い本」 *the Red Book of Hergest* である。（このウェールズ語を英訳したのは19世紀のシャーロット・ゲスト女史 Charlotte Guest）

この物語りを維持して来たのは厳しい教育を受けたウェールズのバード達でその‘真打ち’に当る階級名を‘マビノグ’ mabinog と言った。彼らの歌う子供むきの古謡を‘マビノギ’と言い、その複数として‘マビノギオン’と言う語型がゲスト女史によって造語されたものである。

この原本が中世英・仏文学の上に偉大な影響を及ぼしたことはよく知られている。特にその中の「クルフッフとオルウェン」 *Culhwch and Olwen* と「ルホナブイの夢」 *the Dream of RHONABWY* はアーサー王伝説の直接の種本となっている。(*Four Branches* にはアーサー王物語を含まない。)

ケルト人の神話伝説には大陸も含めて共通点もあるが、彼らの生活に応じた相違もある。アイルランド・スコットランドでは牧歌的明るさと民族の誇りを保つが運命的な悲哀と諦念らしいものも感ずる。反面ウェールズの方は気候風土のせいか人間味がありそれに神秘主義も加わって、大陸に人気のある騎士道物語の混入する素地があったのではないだろうか。ここで神話伝説と言ってもそれは単に荒唐無稽な物語りではない。考古学上に認められる物的、造形的遺物に裏打ちされた言い伝えであることを認識しなければならない。それは古代の総合文化の一翼なのである。ただしその口碑伝説は直ちに文学とはまだ言えない。文学上では主要な一つの過程であり、文字の表現を得てはじめて文学の領域を占めるのである。マギノビの最も早い編纂は11世紀であるが、それは神話の保存と言うよりは文学的な表現に力を入れたものらしい。この物語には後のアーサー王物語群と同一の情景や挿話が多数見られるのは当然である。

これを受けて作られたアーサー王物語の最初の作者は1070年から1150年まで生きていたブレヘリス Bleheris と言われており、フランス語で書かれている。彼はウェールズの貴族であったようだ。これはクレチアン・ド・トロイズ Chrétien de Troyes の「ペルセヴァル、グラール物語」 *Perceval: Conte du Graal* の種本となったもの（既に消失）よりも古いとされている。またジェフリー・オヴ・マンマス Geoffrey of Monmouth (1100—54) のラ

テン語で書いたブリティン王列伝 *Historia Regum Britanniae* を元にしたワース Wace のブリュ物語 *Brut* がフランス語で書かれ、さらに13世紀に入ってラヤモン Layamon がジェフリーの細部の欠落を補いブルート *Brute* を書いた。そして資料は次々に増えてきた。話題はブレトン Breton やノルマン Norman の方まで広がったのである。その中に作者不明の「サー・ガウェインと緑の騎士」 *Sir Gawain and the Green Knight* という頭韻詩が現れた。これは「聖杯物語」 *The Holy Grail* と共にアーサー王物語群の有名な話題であり、後にトーマス・マロリー Sir Thomas Malory によって「アーサー王の死」 *Le Morte Darthur* の中にまとめられている。この緑の騎士は雲突くばかりの巨人で Bercilah de Kartdesert という名であるが、アーサー王が後にルーシヤス征服の途中コンスタンチヌ国で首を打ち落した巨人の原型であろう。そして巨人倭小人はケルト伝説には不断にある話題である。物語りの聖杯は一応キリスト教的に扱われているようだが、古典的ケルト神話から考えればこの民族の聖なる大鍋 caldron と考えるのが合理的と思われる。

ここまではケルト系の種族がブリテンやアイルランド、ブリタニヤを占めていた時代の民族伝承に着目して論じてきた。しかし410年にローマ軍がイギリスから撤退した後のピクト人（旧ケルト人で入墨していたのでこの名が付く）の北からの侵入に備えるため招いたアングロサクソン族が好機とばかり次々とブリテン島の東南から入寇を始めた。彼等は逆にケルト人を西北に押しこめて行き、言葉はゲルマン語を用いていた。古英語の時代である。歴史上からは中世前期に当る。間もなく1066年のノルマンの征服と言う大変動に遭遇、言語的にも大混乱をきたし、ノルマン方言 Norman French 影響下に生じた中英語が中世後期の文化を築くようになる。かつてサクソン等の圧迫を受けたケルト系に或る意味で活力を復活させた。ゲルマン系の古英語は新来のフランス語に駆逐され、それから約二世紀はフランス、ラテン語の教化時代となった。言葉はロマンス語 Romance 化してきた。文学に於てもフ

ランス好みの騎士道冒険談を主にしたロマンス物語が主流になってきた。ブリタニヤは元来ケルト族の故郷である。彼らがブリテンにもたらした文学はフランス語で記述したケルトの物語りであった。かつてのゲルマン系の侵入に対し無念の思いのケルト族の希望の英雄であったアーサー王の物語群はその中の白眉と言える。それが前記のブレヘリスやラヤモン作のケルト英雄譚であった。

アーサー王伝説

中世文学でロマンスの中心的话题であったアーサー王とは如何なる人物であったろうか。史実として人物像を確認する努力は既に中世以来多く試みられて来たが結局無駄であった。

ローマ軍の撤退後ブリテンは元来の民族の小集団の国々となり、その間で抗争も行われた。また北方からの原ケルト系ピクト人の圧力に対抗するため大陸から援助に招いたサクソン人は逆に彼ら自身を西方に追いやる始末となった。そしてブリトン人とサクソン人の戦いが始まるという情勢となっていた。この頃の記録にウェールズ人の僧侶にして歴史家であったギルダス Gildas という人の書いたものがある。アーサーと同時代人と思われるこの人は“ブリテンの滅亡と嘆き” *De Excidio et Conquestu Britanniae* を史実の50年後に著わしているが、その中のベイドン山 Badon の激戦（ブリトンとサクソンの天王山に当る戦）での殊勲の将軍について故意に名前を書いていない。これは彼のローマ教会の僧侶の立場からこの戦の意義を反キリスト教的と否定的に考えたためと言われている。それから300年後にはネンニウス Nennius というやはりウェールズの史家がブリトン史 *the Historia Brittonum* の中で次の様に記している。“Arthur bore the image of the holy Virgin Mary on his shoulders, and the pagans were put to flight with great slaughter.” “The ninth battle was fought at the City of Legions; the twelfth, and the

last, on Mount Badon, where nine hundred and sixty men fell before Arthur's single onset——de uno impetu Arthur.”ベイドン山の戦いについては二人の史家の言が共通していることからそれは史実らしいと推測出来る。またネンニウスのこの戦の記事、この時のその他11回の戦闘については誰もその後記していないし、若し言及していてもそれは何れもネンニウスを種本としていることから考えて、彼のアーサーに関する記事が真実であったかどうか疑わしい。つまり彼はそれまで言い継がれてきた古来の英雄談を修飾的にここに挿入したとも考えられる。また600年頃にはゴドディン Gododin という悲歌の中にもアーサーという名が盛んに出ている。それ等の事情から考えると文字以前よりアーサーなる人物名が伝承されていて、文字の使用とともに早速それが記述されたことが想像される。自らブリトン人であったネンニウスは自分の民族の勝利を誇る気持からベイドン山の合戦の勝利に民族伝説のアーサーなる名前を借用したと考えられる。アーサーはウェールズ人の英雄として8世紀頃まで伝承されて来たケルト神話の重要な構成員であったと考えてよかろう。その原型は何時頃から出現したかは口伝である限りは判らない。然しアーサー王物語群中のアーサー王の直接拘わらないテーマは古いヨーロッパ各地に点在した神話伝説の部分的借用をしている所からみてケルト族のこの地方への移住以後とも、以前からのものであったとも推測できる。そうなればアーサーなる人物は実在の人間を超えた存在となり得るが、それは神話学の領域に入ることであり、人類文化の広範な見地から考える必要性が生じてくる。コーンキングを崇める農業神話的要素も考えられ、また統治、武力、稔りに集約されるインド・ヨーロッパ説話につながる可能性も大いに考えるべきである。本論の目的はその追究ではなく、イギリス文学にそれが伝承されてゆく過程とイギリス文学形成の様相を探ることである。その具体例として「アーサー王」について辿ってみたい。

マロリーの「アーサー王の死」(*Le Morte Darthur*)

様々なアーサー王を語る中英語、ラテン語、フランス語の物語りが豊富なテーマの下に中世のイギリスを賑わしはじめた。その中で後のスペンサー Edmund Spencer, ウォルター・スコット Walter Scott, ウィリアム・モリス William Morris, スウィンバーン A.C. Swinburne, テニスン A. Tennyson 等の文人に読まれ多大の影響を直接に与えたのが、この Sir Thomas Malory が集約した「アーサー王の死」であった。これに序文を付け、1485年に印刷出版をしたのが、ウィリアム・キャクストン W. Caxton である。

フランス、イギリスの数あるアーサー王伝説を筋の通る面白い一つの物語として読み易くまとめあげたのがマロリーのこの作品であった。もともと英、^{ラテン}仏、羅典からの寄せ集めであるため、一貫性の点から無理な所の生ずるのはやむを得ないことであろう。しかしケルト伝承としての特長はよく生かされている。全体を21巻に分け、さらに各巻を平均20章前後に区分けし全507章となっている。

マロリーが依拠した文献は「ブリテン列王史」でその第137章から178章までのアーサー王に関する部分である。ウーゼル・ペンドラゴン王がコーンウォール公の夫人イグレーヌを冒してアーサー王を生ませた。後アーサーはブリテン国王となり、諸国を統一、ローマを征服する。故国を離れている留守に甥のモードレッドが王位と王妃を篡奪したと知り、ブリテンに戻って彼を倒す。しかし自らも重傷を負いアヴァロンの島に去る。この筋書はマンマスがブリトン語からラテン語訳したのを再び訳し戻したものである。アーサーの伝説はケルト系の間では普及していた話であることは前にも述べた通りである。それ以前にアーサー伝説の古い原形「マビノギオン」が伝承されていたが、書写されたのは14世紀初頭でジェフェリ・オヴ・マンマスの列伝より古い。

「アーサー王の死」をここで全部要約など出来るものではないので、物語の原典別に全体を八篇に分けて分類してみる。これはオックスフォード大学出版 *The Works of Sir Thomas Malory* のヴィナーヴァ E. Vinaver 説による八つの話題（原典）別を適用したものである。

第一篇 THE TALE OF KING ARTHUR アーサー王の物語。キ

ャクストン版の一巻から四巻。原典 Suite de Merlin

I. Merlin

II. Balin or the Knight with the Two Swords

III. Torre and Pellinor

IV. The War with the Five Kings

V. Arthur and Accolon

VI. Gawain, Ywain and Marhalt

第二篇 THE TALE OF THE NOBLE KING ARTHUR THAT

WAS EMPEROR HIMSELF THROUGH DIGNITY OF HIS

HANDS アーサー王とルーシヤスの物語。キャクストン版五

巻。原典 Morte Arthure

第三篇 A NOBLE TALE OF SIR LAUNCELOT DU LAKE 湖の

ランスロットのいみじき物語。キャクストン版六巻。原典 Lan-

celot del Lac

第四篇 THE TALE OF SIR GARETH OF ORKNEY THAT WAS

CALLED BEWMAYNES オークニー国のガレス卿の物語。

キャクストン版七巻。原典不明

第五篇 THE BOOK OF SIR TRISTRAM DE LYONES リオネ

スのトリストラム。キャクストン版八巻から十二巻。原典13世紀

フランス版 Tristan

I. Isode the Fair

- II. Lamerok de Galys
- III. La Cote Male Tayle
- IV. Tristram's Madness and Exile
- V. The Castle of Maidens
- VI. The Round Table
- VII. King Mark
- VIII. Alexander the Orphan
- IX. The Tournament at Surluse
- X. Joyous Gard
- XI. The Red City
- XII. The Tournament at Lonezep
- XIII. Sir Palomides
- XIV. Launcelot and Elaine
- XV. Conclusion

第六篇 THE TALE OF THE SANKGREAL BRIEFLY DRAWN
 OUT OF FRENCH WHICH IS A TALE CHRONICLED FOR
 ONE OF THE TRUEST AND ONE OF THE HOLIEST
 THAT IS IN THIS WORLD 聖杯物語。キャクストン版十
 三巻から十七巻。原典フランス語 *La Queste del Saint Graal* と
Mort Artu

- I. The Departure
- II. The Miracles
- III. Sir Perceval
- IV. Sir Launcelot
- V. Sir Gawain
- VI. Sir Bors
- VII. Sir Galahad

VIII. The Castle of Corbenic

IX. The Miracle of Galahad

第七篇 THE BOOK OF SIR LAUNCELOT AND QUEEN
GUINEVERE ランスロットとクウィーングネヴィヤ。キャ
クストン版十八卷十九卷。原典聖杯と同一。

I. The Poisoned Apple

II. The Fair Maid of Astolat

III. The Great Tournament

IV. The Knight of the Cart

V. The Healing of Sir Urry

第八篇 THE MOST PITEOUS TALE OF THE MORTE ARTHUR
SAUNZ GUERDON アーサー王の悲しき物語。キャクスト
ン版二十卷二十一卷。原典フランス語 Mort Artu と14世紀英詩
Le Morte Arthur

I. Slander and Strife

II. The Vengeance of Sir Gawain

III. The Siege of Benwick

IV. The Day of Destiny

V. The Dolorous Death and Departing out of this world of Sir
Launcelot and Queen Guinevere

以上の八篇の内に殆んど総てのケルト伝説の代表的系列の物語りが含まれ
ているので、後世のイギリスの文人作家達の作品の典拠となった。例えば第
一篇の I. マーリン Merlin の19章に以下の話がある。

森に入るとすぐ、目の前に大きな雄鹿を見つけた。

「この鹿はわたしが追うぞ」と言うと、アーサー王は馬に拍車をかけ、

長いあいだ鹿を追い廻した。見事な力を発揮して何度もすんでのところで鹿を仕止めんばかりに追いつめた。……

そこでアーサー王は身をひそめている雄鹿と、死んで倒れている自分の馬を眺めた。王は泉のほとりに腰を下して、物思いにふけた。そのようにして腰を下していると、三十頭ほどもあると思われる猟犬の声が聞こえたような気がした。その時、未だかつて見たことも聞いたこともない不思議なけものが王の方へやって来るのに気づいた。けものは泉のところへ来て、水を飲んだ。三十頭もの猟犬が獲物を追って吠えたてているように聞こえた音は、そのけものの腹の中から出ていたのである。しかし水を飲んでいる間じゅう、けものの腹はなんの物音もたてない。水を飲んでしまうと、また大きな音を立ててけものは立ち去った。アーサー王はあっけにとられた。物思いにふけているうちに、いつの間にかぐっすりねむってしまった。

やがて一人の騎士がアーサー王に歩み寄り、「物思いにふけて、まどろんでおられる騎士どの、ふしぎなけものがこちらへ来るのをごらんになりませんでしたか？」とたずねた。

「そんなふうなものを見かけました」とアーサー王は答えた。「もう二マイルほど向こうへ行ってしまいました。あのけものをどうなさるおつもりですか？」

「わたしは長い間あのけものを追いかけていましたので、私の馬は死んでしまいました。別の馬があれば追跡をつづけるのですが……」

ちょうどそこへ一人がアーサー王の馬を引いて来た。騎士はその馬を見ると、王に頼んだ。

「その馬をわたくしにお譲り下さいませんか。わたしはこの一年間、あのけものを追い続けてきました。わたしがあのけものをやつつけるか、或いはわたしが致命の血を流すか、二つに一つしかありません」

けものを探求していた人は当時王であったペリノアである。ペリノア

王の死後はパロミデス卿が引継いで追跡を続けた。¹⁾(厨川文夫訳)

この話の内容、心象とも「マギノビのキュルークとオルウェン」*Culhwch and Olwen* の中の話ときわめて類似している。その中ではキュルークの叔父アーサーがその愛犬カバル Cafall と共にブリテン島に住む妖怪猪ボア Boar トルーフ・トロイト Twrch Trwyth を追い求めて旅を続けるのである。このボアは王位と生命に拘わる象徴的な動物らしい。キュルークはアーサーが追っていたこの猪の両耳の間から出た櫛、鋏と剃刀^{レザ}を取り戻したが生れてすぐつれ去られカーエル・ロイ Caer Roy (冥土) に行った子を探しに出るという内容であるが、この話は古く遡れば更に大陸のケルト系神話につながり、より根深く広範なインド・ヨーロッパ神話に合流するであろう。現にアイルランドやブリテンに野猪は居ない。大陸時代の神話の名残りではないか。考えを逆にすればこのマロリーのアーサー王物語はケルトの伝説をイギリス文化に深く因縁付けた作品として意味深い。例は替るがこの作品に形式、内容上よく似ている後世の作品にウォルター・スコットの「アイヴァンホー」*Ivanhoe* がある。

アイヴァンホー

スコットは1771年にエディンバラに生れ、1832年にトゥイード河の近くで死んだ。“アイヴァンホー”を書いたのは1820年である。幼い頃からエディンバラ近辺でこの地方の古い民謡や物語の博い知識を得ていたのが彼に後世この作品を書かせる素地となった。

「アイヴァンホー」は19世紀に書かれた11世紀のノルマン人征服の時の物語りである。アイヴァンホーと言う主人公はアーサー王とは逆に、被征服者サクソン側に立っている父と立場を異にする息子である。荒筋を書けば次のようになる。

サクソン朝はノルマンディ公に乗っ取られ、その後裔がイギリスを支配す

る。サクソン王家の遺児ロウィーナ姫を頑固に守るサクソンの忠臣セドリックはその息子アイヴァンホーが彼女に恋心を抱いたのを怒り息子を勘当する。彼は父の敵視するノルマン側であるリチャード獅子王の直臣となり、十字軍に加わり聖地奪回に従軍する。リチャードの留守中に皇弟ジョンは国政を恣にし、留守番の諸公を手なづけ、一方サクソンの残党を圧迫する。その間度々彼はトーナメントを催し騎士道を鼓吹する。その勝者は時の場^{トーナメント}面の女王より桂冠を授けられるがその女王の推薦権は勝者に与えられる。国王留守中のイギリスは国情不安定であったので弟王は度々トーナメントを行い騎士ばかりでなく住民達のせめてもの楽しみを与えて人気を保っていた。或る^{トーナメント}会^{トーナメント}のときのこと、この日の勝者が御堂の騎士ギルベールに決りかけていた所に突如騎馬で飛び入った武者が挑戦し、ギルベールを馬上から叩き落す。勝利を納めた無名の騎士はこの日のトーナメントの女王にロウィーナ姫を指名し、彼女より桂冠を受けたまま名乗ることもなくここを立去る。この時王弟ジョンの目にとまったのは見物中の黒い目のレベッカであった。それはジョンの軍資金の調達人でユダヤ人の高利貸アイザックの娘であった。絶世の美女で心の清い女であったため最後は闘技で破れたさきのギルベールにしつこく言いよられる。これが彼女を不幸にし、ついには教会から聖なる騎士を迷わす妖女に仕立てられ、火刑にされることになる。当時の宗教裁判では被告人は告発者に決闘を挑み、それに勝てばそれを神の御心と受け取って刑は赦免されることになっていた。その時被告人が誰か代って闘ってくれる人に依頼してもよいことになっていた。然しこのユダヤ娘には同情はしても後難を恐れて誰も代理の闘士を引受ける様子はなかった。その当日いよいよ日暮も近付き火刑は確定的となった。これに続いて作品の第43章は次の様に記している。

しかし魔法の罪に問われたユダヤの女を救うために現われることの出来るものまた現われようとする者はだれもいないということを一般に信

じていた、マルヴォアザンにけしかけられた騎士たちは今やレベッカの誓言の無効を宣する時であると互にささやき合った。この瞬間に一人の騎士が、馬をせきたてて、試合場を目ざして平原に現われた。大勢の声が叫んだ「チャンピオン——」と。大衆はその先主感と偏見にもかかわらず、騎士が（馬上）試合場に乗り込むと異口同音にさげんだ。しかしその次の瞬間には騎士のちょうど折よき到着によって起こった希望はうちけされた。彼の馬は、何マイルもの間せきたてられて全速力を出したため、疲労のためよろめくように見えた。そして騎手は、試合場内で如何に剛胆に振舞っても、弱さと疲労から鞍上に身を支えることが殆どおぼつかないように見えた。

.....

マルヴォアザンは言った「新来者は自らが立派な騎士であり、立派な素性のものであることを先ず示さなければならない。御堂は御堂の闘士を名もない人間に対して送りはしない」

騎士は、甲を上げて、言った「マルヴォアザン殿、君の名よりも私の名はよく知られており、私の家柄は君よりも純粹である。私はアイヴァンホーのウィルクレッドである」

.....

「グランド・マスターは私に戦を許されるか」とアイヴァンホーは言った。²⁾
(菊池武一訳)

この様にしてグランド・マスターの承認を得たアイヴァンホーは更に自ら身替りとなる被告のレベッカに向いその承認を求める。レベッカは喜んで認めると共にその疲労状態での戦いは無理と考え、たとい我が身は焼死しようともこの武士が果てるかも知れないことを気使って辞退する。しかし騎士はかまわず位置につき槍を執る。ギルバールもかまえる。ラッパが鳴り響き両者は突進する。

アイヴァンホーの疲れた馬と同様疲れている乗手は、果せるかな、御堂の騎士のねらいを定めた槍と力強い駿馬の前に屈服した。闘のこの結果は皆予見していた。しかしアイヴァンホーの槍がボア・ギルベールの楯にちょっとさわっただけであったけれど、ギルベールは、観衆の驚いたことに、鞍上でよろめき、あぶみがはずれて、場内に落ちた。

アイヴァンホーは、自分の仆れた馬から抜け出て、急いで立ち上り、剣をもって勝負を立て直そうとした。しかし彼の敵手は起き上らなかった。ウィルフレッドは、自分の足を敵手の胸におき、剣の切っ先をのどにつきつけて、甲をぬげ、さもなくば即座に殺すと言った。ボア・ギルベールからは何の応答もなかった。

.....

グラント・マスターは天を仰いで言った。「まことにこれは神の裁きである——フィアット・ボルンタス・トゥア（天よ御心をなしたま³⁾え！）」

そこでレベッカは自由で無罪となる。これと全く同じ場面は「アーサー王物語」にも何度か現われている。第十八巻「ランスロット卿と王妃」は王妃を救う彼の武勇談である。ランスロットの聖杯探求の旅から帰ったことをアーサー王も王妃も円卓の騎士ともども祝ってくれたが、懐かしさのあまり妃はランスロットに愛がさめたのではないかと愚痴をこぼされる。彼の言い訳はかえって妃をヒステリックにし、宮廷からの退去を命ぜられてしまった。彼は国外に休養に出た。その留守中に王妃が二十四人の円卓の騎士をロンドンに招き、自分はランスロットだけを気に入っているわけではないことを見せたいためであった。所がその席でピネル卿がかねて私怨を抱いているガウエインを暗殺のために仕込んだ林檎の毒が皮肉にもおかど違いのパトリス卿を殺してしまった。騎士達は激怒し王妃を犯人と誤解して告発した。これに対し王妃の潔白を証明するため闘おうとする者は一人もなかった。王はいた

く悲しんだが公正な裁判は行わなければならない。彼は妻がしたとは思えなかったので全く妻に罪を着せたくはなかった。誰か立派な騎士に身を賭して闘ってもらいたかった。然し処刑は十五日後ウェストミンスター近くの草原と決った。困りきった王はボールス卿に助けを求めた。彼は仲間から嫌疑をかけられることを恐れたが止むを得ず引受けた。但し偶然自分よりすぐれた騎士が現れて妃のために闘うと言われたらその方に代ってもらうと言う条件であった。彼はこっそり宮廷をぬけ出、ブラシャス卿の下に密使を送りランロットに逐一報告した。グウィネヴィア王妃はどうも騎士達によく思われていないのである。さて当日となり、王も妃も騎士達もすべて草原に集った。

王が王妃や、円卓の騎士を大勢伴って現われると、王妃は法務長官の保護下に置かれた。鉄の火刑柱の周囲には大きな火が用意されていた。もしマドール・ド・ラ・ポルト卿の方が勝てば、王妃は火あぶりの刑に処せられるのだ。

当時はたとえ、信任厚い人でも、愛されている者でも、近親者でも、正当な裁き以外、何ら酌量の余地はないという、ならわしだった。それは王にも騎士にも、差別なく行われたし、王妃の上にも、一かいの貧しい女の上にも平等に行われた。

こうしている間に、マドール・ド・ラ・ポルト卿が来て、王の前で「王妃は、いどこパトリス卿を殺害した」と宣誓し、反対を唱える者があれば、一対一で戦い、身を以ってこの宣誓を立証すると言った。

そこへボールス・ド・ガニス卿がやって来た。

「グウィネヴィア王妃は無罪だ。王妃に課せられたこの罪状をはらすために、私はこの手で立証してみせる」とボールス卿が言った。

「それなら、戦う用意をしろ」とマドール卿が言った。「お前とわしの⁴⁾どちらが正しいか証明してみせようではないか」

と言うわけで二人は馬上の人となる。マドール卿は短気だから先に出て試合場をぐるぐる廻りながら相手の出場を促している。これ以上は引き延せぬとボールス卿も馬で試合場に現れた。

その時、近くの森から一人の騎士がやって来るのに気づいた。その騎士は完全に武装し、白馬にまたがり、見なれぬ紋章の風変りな楯を持っていた。彼は全速力で馬を飛ばし、ボールス卿のところへ来ると、こう言った。

「騎士どの、どうぞお気を悪くなくさらないで頂きたい。この戦さは、あなたよりすぐれた騎士がすべきです。ですから、どうかお身を退いて頂きたい。とにかく私は今日一日、長い間かかってここへかけつけたのですから、私に戦わせて頂くべきです。先日お話した時も、そうお約束しましたな。御親切、身にしみてありがたく存じます。」

このように言って戦士交替した。「何者か？」と王に問われても名を明さずマドール・ド・ラ・ポルト卿と戦った。卿は槍を折ると馬を捨てて二人で戦った。剣戟で争ったがついに無名の騎士に組み伏せられ卿は命乞いした。すると王妃の告訴を取り下げ、この度の件を墓石にも書かぬ約束を取り付けた上で許した。王に労いの酒をすすめられたときはじめて湖のランスロットであることが判明したのであった。王は妃と共に感謝した。その後ペレアス卿の奥方である「湖の姫」ニムエという女魔術師が王宮に来てこれはピネル卿の犯行であると真相を公表した次第である。これでアイヴァンホーが如何にアーサー王物語に依拠したかが判るであろう。この裁判とその決闘に駆けつけるパターンは「アーサー王物語」では何度か姿を変えて用いられ常套手法となっている。アイヴァンホーはそれを換骨奪胎して文学的表現に見事に成功している。前者は辻褄を合わせるのに屢々魔女やケルトの伝説に馴染みの妖術などを用い可成り強引であるが、それはそれなりに素朴さの魅力をもつ。

しかし後者は叙述が細密丁寧であるところに言語文化の発達向上を思わせられる。

アーサー王物語はアングロサクソン文化にケルト及びフランス文化が流入したのに対し、アイヴァンホーはケルト・フランス系とサクソン系文化の交流を行っている。前者はフランスを介してケルト系の自己発揚であり、後者はアングロサクソンとノルマン・ケルトの融合を語っている。前者は550年前を意識し、後者は750年前を意識している。何れも異文化の対立と融合の文学上の表現である。特にアイヴァンホーでは文学面だけでなく現代英語の成立過程をも意識的に扱っている。それは特に第一章で顕著である。

「はてさて、お前さま、この^{しそく}四足で走りまわり、ぶうぶうなるけだものをなんといいなさるのじゃ」

「豚、スワインじゃ、あほう。そんなことどんなあほうでも知つとるわい」

「そのスワイン（豚）は立派なサクソン語じゃ。したがその牝豚が皮をむかれ、はらわたをぬかれ、四つ裂きにされ、踵をしばってつるされ、まるで謀叛人のような目にあわされたときには、お前さまそれをなんといいなさる？」

「ポーク、だあね」

「どんなあほうでもそれもやっぱり知ってるとはありがたいではござんせんか。でそのポークというのは立派なノルマン・フランス語のようでござんすね。このけだものも、生きてサクソン人の奴隷の世話になっているあいだは、サクソンの名前でおりまする、それがお城の広間に召しだされお偉いみなさまのごちそうのお仲間になるだんになると、それ、ノルマン人になってポークという名前になりまする。ガースどの、これをなんと^{おぼ}思し召す、へっ？」

「ウォンバどん、どうしてそのあほうの頭で考えついたかしらんが、な

るほどこれはもっともな道理じゃな」

「いや、まだござる」ウォンバはあいかわらずの調子でいった。「長老オックス（牛）どのじゃ。お前さまのような小作人で農奴の世話になっているあいだはサクソンの名前を捨てなさらん、がさて長老どのをむしゃむしゃ食べるありがたいお顎^{あご}さまの前までゆくと、これがビーフとなって、熱烈なフランスの色男に早がわりするのでござる。カーフどのもおなじくムシュ・ド・ヴォーと相成る。世話のやけるときはサクソンで、おたのしみの種になるときにはノルマンの名前になりまするの⁵⁾じゃ」

イギリス国民は中世から近世にかけて民族の習慣、特に言語の面で日常的な苦難を経験してきた。であるからそれが現代英語に統一したときに一つの国民としての自覚が出来たのであった。アングロサクソンが圧倒的に支配したブリテン島に中世のノルマン人は在来のケルト人の伝統と文学をフランス語、ラテン語、及び新しく醸し出された英語を用いて流入してきた。それと与って力を添えたのがこのマーロウがまとめてカックストンが出版した「アーサー王の死」の物語である。これがサクソン文化に浸透し、その後のイギリス文化形成のもう一つの伝統となった。

「アーサー王の死」後世文学への影響

真近にはスペンサー E. Spencer の「妖精女王物語」*The Faerie Queene* 六巻がある。十二人の騎士とアーサー王の、徳と騎士道をテーマに歌った大ロマン詩であった。しかし彼はウォルター・ローリー卿への手紙にある如く、この作品全巻の目的は紳士、ないしは身分ある人に立派な道德的訓育を施すにあると言うのである。そのためにアリストテレスの言う十二の徳を十二人の騎士に割り当てているので、アーサー王は寛仁の徳 Magnificence をもって全体を統べる役を負っているに過ぎない。しかしその第一巻七篇の三十一

節で美事なアーサー王の挿絵と共にきらびやかな描出を行っている。真を象徴する娘ユナ Una をアーサー王子が助ける場面だけに使われている。

次に17世紀のミルトン Milton がその大叙事詩のテーマに用いようとしたが、彼はこのアーサー伝説の歴史性に疑問を抱くと共に、チューダ王朝の家系偽造の政治的目的に使われたことに対する嫌悪感から途中で放棄した。

1852年にマーシュウ・アーノルド Matthew Arnold がアーサーの話題をとりあげている。それは物語詩の形によるトリストラムとイゾールト *Tristram and Iseult* であるが、その原典としたものはフランス語のもので、マロリーからは部分的な借用をしている。しかし全体としては小規模な作品であり、ストーリーを物語からとったロマン的な詩である。

19世紀の桂冠詩人アルフレッド・テニスンも Arthur 物語を試みている。モルト・ド・アーサー *Morte d' Arthur*, ガラハッド *Galahad*, ランセロットと女王グネビア *Sir Launcelot and Queen Guinevere* の試作がある。彼はマロリーをよく研究して幾度か詩作を行っているが、決定的なものはないと言えよう。それともあまり評価されていないと見てもよい。ヴィクリトア文学に属すると言う時代的不利もまぬがれまい。その後スウィンバーン Swinburne が1882年に *Tristram of Lyonesse* でこれを扱っている。トーマス・ハーディにも1923年に *The Famous Tragedy of the Queen of Cornwall* という戯曲があるが評価はされていない。

以上の他に文学上度々用いられているアーサー王物語についてはやはりトーマス・マロリーの「アーサー王の死」が直接大きな影響力を持っている。それには1485年のキャックストンのやや強引な編集と出版の手柄を考慮に入れるべきである。マロリー自身の謎めいた生涯とキャックストンの不思議な編集の才が相乗作用を起してかえって瘦辞の魅力を保っているのではなかろうか。序ながらこのキャックストンのイギリス中世からルネッサンス文芸に係る功績は極めて大きいと言えるのである。その研究は文化史の領域に亙るものとする。

以上でケルト伝承のイギリス文学への同化の一つの例をたどって見た。この試みの他に、より重要であるが理論的に説明し難い部分に触れておきたい。

イギリス文学の中のケルト

ドイツ人はドイツの中のケルト文化の存在を知りつつも認めたがらないと同様、アングロサクソンもその影響を認めるのに潔くないと思われる。しかし英文学史の中にアングロアイリッシュが大きく貢献をしていることは事実である。元来ケルト人は血族的集団と言うよりは文化的言語的集団であるので、彼等の性格と所産を強く結びつけ過ぎることは気をつけなければならない。ここに民俗学 *folklore* など取り出すよりはケルト系文化の特性を考慮しつつ、懐古的にその英文学に与えた活力を見るのは意義のあることであろう。

ケルト人はエルベ川より南のドイツに住む北方人種でゲルマン人と同種のものである。それはゲルマン人とは同系統の言語とインド・ヨーロッパ神話の系列に属していたことから考えられる。ケルト人はハルシュタットとラテーヌにおいて高度な鉄器文明を持っていたことは既に幾度か述べた。彼らの一部はアルプスをこえてイタリアに、他の一部はラインを渡ってフランスに入った。後者の系統は二度以上に分かれてイギリスに移動していた。そこでPケルト語のウェールズ語とQケルト語のゲール語（アイルランドとスコットランド）の方言ができたのである。他方後に合流したゲルマン系民族とも相当な共通性があると考えてよい。それは神話に於ける類似性でも判ることである。ただ両民族は彼らの経由した方向と時代の隔絶のため民族性に大きな相違ができた。

さて、アイルランド、ブリテン島に來たケルト人達は大陸生活の頃から運んできた特色ある美術様式を持っている。前5世紀には既にエトルリアの影響を受けたアルカイック様式、次にギリシャを起源とする植物模様の前4世

紀の時期があり、ついで平面、立体技法の前3世紀時代となり、最後に多様な混合様式となってアイルランドによく存続し、キリスト教とケルト文化の混合体を表現してラ・テーヌ美術の棹尾を飾っている。この様な文明様式はケルト人固有の強力な感覚、詩想と想像力から得られたものと言える。先ず豊かな感受性から湧き出した叙事詩があり、それが空間的装飾に変容し、多様な曲線、反転曲線、組紐、草木動物模様、変形譚の表現を形造ってゆく。建築ではアイルランド・ロマネスクやゴシックが12世紀、15世紀を特長づけている。しかもその原型は彼等の祖先の遺産を十分に受け継いでいるのである。その特有の感性は彼らの体質のみでなく生活形式や宗教感覚から体得したものであろう。神話、伝承の豊かさはそれを物語っている。ブリテン諸島にケルト系が存続する限りその民俗性は息づいていると考えて不都合ではあるまい。後世英文学史を飾った幾多の文人達の出生を調べてみるとスコットランド、ウェールズ、アイルランドに縁りの作家が多いのに気付くのである。中にはケルト系でありながら外国に育った人、血族でないのにアイルランドに愛着をもった者もいる。この人達は英語でイギリス人として文芸活動をしたのである。

J. スウィフト, 1667—1745. O. ゴールドスミス, 1728—1774. エドモンド・バーク, 1729—97. R.B. シェリダン, 1751—1816. M. エッジワース, 1767—1849. T. ムーア, 1779—1852. W. カールトン, 1794—1869. オスカー・ワイルド, 1856—1900. J.M. バリー, 1860—1937. S.A. コナン・ドイル, 1859—1930. G.B. ショウ, 1856—1950. J.M. シング, 1871—1909. G. ムーア, 1853—1933. W.B. イェイツ, 1864—1939. ジェイムス・ジョイス, 1882—1941. ジェイムス・スティブンス, 1882—1950. ロバート・ルイス・スティヴンソン, 1850—94. S. オケーシー, 1884—1964. F. オコーナー, 1903—1966. T.S. エリオット, 1888—1965. ロバート・リンド, 1879— . サミュエル・ベケット, 1906—

1989.

枚挙に遑ないので他は割愛するが、何れの作風もローマン的、情熱的、幻想的、空想的、神秘的、感傷的と感覚に訴えるもの、奇想的な思考、また超自然性の許容を特色としている。個人的同族的な内面的思考の方が民族的、大集团的な思慮より勝っているように私には思われるが、文化人類学よりの科学的裏打ちが出来るであろうか。

注

- 1) And as sone as he was in the foreste, the kynge saw a grete harte before hym.

‘Thys harte woll I chace,’ seyde kynge Arthure.

And so he spurred hys horse and rode aftir longe, and so be fyne force oftyn he was lyke to have smytten the herte. Wherefore as the kynge had chased the herte so longe that hys horse lost his brethe and felle downe dede, than a yoman fette the kynge another horse.

So the kynge saw the herte unboced and hys horse dede, he sette hym downe by a fowntayne, and there he felle downe in grete thought. And as he sate so hym thought he herde a noyse of howundis to the som of thirty, and with that the kynge saw com towarde hym the strongeste beste that ever he saw or herde of. So thys beste wente to the welle and dranke, and the noyse was in the bestes bealy 「lyke unto the questyng of thirty coupyl houndes, but alle the whyle the beeste dranke there was no noyse in the bestes bealy」. And therewith the beeste departed with a grete noyse, whereof the kynge had grete mervayle. And so he was in a grete thought, and therewith he felle on slepe.

Ryght so there com a knyght on foote unto Arthure, and seyde, ‘Knyght full of thought and slepy, telle me if thou saw any stronge beeste passe thys way.’

‘Such one saw I,’ seyde kynge Arthure, ‘that ys paste nye two myle. What wolde ye with that beeste?’ seyde Arthure.

‘Sir, I have folowed that beste longe and kylde myne horse, so wolde God I had another to folow my queste.’

Ryght so com one with the kyngis horse. And whan the knyght saw the horse he prayde the kynge to gyff hym the horse, ‘for I have folowed this queste thys twelve-monthe, and othir I shall encheve hym othir blede of the beste bloode in my body.’ (Whos name was kynge Pellynor that tyme folowed the questynge beste, and afftir hys dethe sir Palomydes folowed hit.)

- 2) It was, however, the general belief that no one could or would appear for a Jewess accused of sorcery; and the knights, instigated by Malvoisin, whispered to each other that it was time to declare the pledge of Rebecca forfeited. At this instant a knight, urging his horse to speed, appeared on the plain advancing towards the lists. A hundred voices exclaimed, ‘A champion!—a champion!’ And, despite the prepossessions and prejudices of the multitude, they shouted unanimously as the knight rode into the tilt-yard. The second glance, however, served to destroy the hope that his timely arrival had excited. His horse, urged for many miles to its utmost speed, appeared to reel from fatigue, and the rider, however undauntedly he presented himself in the lists, either from weakness, weariness, or both, seemed scarce able to support himself in the saddle.

.....

‘The stranger must first show,’ said Malvoisin, ‘that he is good knight, and of honourable lineage. The Temple sendeth not forth her champions against nameless men.’

‘My name,’ said the knight, raising his helmet, ‘is better known, my lineage more pure, Malvoisin, than thine own. I am Wilfred of Ivanhoe.’

.....

‘Does the Grand Master allow me the combat?’ said Ivanhoe.

- 3) The wearied horse of Ivanhoe, and its no less exhausted rider, went down, as all had expected, before the well-aimed lance and vigorous steed of the

Templar. This issue of the combat all had foreseen; but although the spear of Ivanhoe did but, in comparison, touch the shield of Bois-Guilbert, that champion, to the astonishment of all who beheld it, reeled in his saddle, lost his stirrups, and fell in the lists.

Ivanhoe, extricating himself from his fallen horse, was soon on foot, hastening to mend his fortune with his sword; but his antagonist arose not. Wilfred, placing his foot on his breast, and the sword's point to his throat, commanded him to yield him, or die on the spot. Bois-Guilbert returned no answer.

.....

'This is indeed the judgment of God,' said the Grand Master, looking upwards—'*Fiat voluntas tua!*'

- 4) And so whan the kyng was com with the quene and many knyghtes of the Table Rounde, so the quene was than put in the conestablis awarde and a grete fyre made aboute an iron stake, that an sir Mador de la Porte had the bettir, she sholde there be brente; for such custom was used in tho dayes: for favoure, love, nother affinité there sholde be none other but ryghtuous jugemente, as well uppon a kyng as uppon a knyght, and as well uppon a quene as uppon another poure lady.

So thys meanewhyle cam in sir Mador de la Porte and toke hys [othe] before the kyng, how that the que[ne] ded thys treson untill hys cosyn sir Patryse, 'and unto myne othe I woll preve hit with my body, honde for hande, who that woll sey the contrary.'

Ryght so cam in sir Bors de Ganys and seyde that as for quene Gwenivere, 'she ys in the ryght, and that woll I make good that she ys nat culpable of thys treson that is put uppon her.'

'Than make the redy,' seyde sir Madore, 'and we shall preve whethir thou be in the ryght or I!'

.....

And than was he ware where cam frome a woode there fast by a knyght all armed uppon a whyght horse with a straunge shyld of straunge armys, and he cam dryvyng all that hys horse myght renne. And so he cam to sir

Bors and seyð thus:

‘Fayre knyght, I pray you be nat displesed, for here muste a bettir knyght than ye ar have thys batayle. Therefore I pray you withdraw you, for wyte you well I have had thys day a ryght grete journey and thys batayle ought to be myne. And so I promysed you whan I spake with you laste, and with all my herte I thanke you of youre good wylle.’

- 5) ‘Why, how call you those grunting brutes running about on their four legs?’ demanded Wamba.

‘Swine, fool—swine,’ said the herd; ‘every fool knows that.’¹⁰

‘And swine is good Saxon,’ said the Jester; ‘but how call you the sow when she is flayed, and drawn, and quartered, and hung up by the heels, like a traitor?’

‘Pork,’ answered the swineherd.

‘I am very glad every fool knows that too,’ said Wamba, ‘and pork, I think, is good Norman-French; and so when the brute lives, and is in the charge of a Saxon slave, she goes by her Saxon name; but becomes a Norman, and is called pork, when she is carried to the castle hall to feast among the nobles. What dost thou think of this, friend Gurth, ha?’

‘It is but too true doctrine, friend Wamba, however it got into thy fool’s pate.’

‘Nay, I can tell you more,’ said Wamba in the same tone: ‘there is old Alderman Ox continues to hold his Saxon epithet while he is under the charge of serfs and bondsmen such as thou, but becomes Beef, a fiery French gallant, when he arrives before the worshipful jaws that are destined to consume him. Mynherr Calf, too, becomes Monsieur de Veau in the like manner: he is Saxon when he requires tendance, and takes a Norman name when he becomes matter of enjoyment.’

〔使用文献〕

Malory Works, 1971, Eugène Vinaver, Oxford Press, London.

Ivanhoe, Sir Walter Scott, Penguin Books.

The Mabinogion, Guyn Jones, Everyman’s Library.

A History of Ireland & Her People, E. Hull, Phoenix Publishing Company, Dublin.

The Cambridge History of English Literature, Cambridge Univ. Press.

『古代伝説と文学』土居光知，岩波書店，1960。

『ガリア戦記』カエサル著，近山金次訳，岩波文庫。

『ゲルマン，ケルト神話』トンヌラ・ロート・ギラン著，清水茂訳，みすず書房，1960。

『近代英国抒情詩歌研究』丸山覚著，京浜出版，1991。

『概説イギリス史』青山吉信編，有斐閣，1982。

『アーサー王（その歴史と伝説）』リチャード・バーバー著，高宮利行訳，東京書籍，1983。

『ケルト神話』プロインシアス・マッカーナ著，松田幸雄訳，青土社，1991。

『イギリス出版史』ジョン・フェザー著，箕輪成男訳，玉川大学出版部，1991。

『西洋史地図』村川堅固著，宝文館，1933。

『アーサー王の死』中世文学集 I，T. マロリー作，厨川文夫訳，筑摩書房，1990，9 版。

『アイヴァンホー』W. スコット，菊池武一訳，岩波文庫，1992。

『ケルトの神話』井村君江，ちくま文庫，1991。

『ケルト人，*Les Celtes*』V. クルタ著，鶴岡眞弓訳，白水社，1992。

〔訂正〕 前々回の国際経営論集 No. 3 (1992.3 神奈川大学) の中の拙論「イギリスの国民と文学」p. 215, l. 8 「ノーマンコンケスト」を「アルフレッド」と訂正する。